# 傾聴活動のために養成講座

## 居宅訪問続けるボランティアセンター

東北教区災害ボランティアセンターでは、被災地のコミュニティー作りを応援しようと仮設住宅でのお茶会のサポートを継続しているが、一方で被災体験による不安などからコミュニティー活動への参加や対人関係の構築に困難をきたす人も多く、これらの深い悲しみや孤独を抱える人の心をケアしようと居宅を1軒1軒訪ねる地道な訪問活動を重ねている。

大切な人や住居・財産、職などを失った人は重大な喪失感や極度のストレスを抱えており、新たな環境に適応できない人や、他者にSOSを発することができない人も多いという。自死や孤独死に至る場合も懸念され、水際の取り組みが課題となっている。

同センターは仮設への入居が始まった昨年5月頃から居宅訪問を開始。お茶会の活動日に相談員が、居宅に残っている人にお茶会への参加を呼びかけるなどしながら傾聴や対話を通した心の支援を行っているが、被災した人の気持ちに寄り添った慎重な対応が求められるため、昨年10月までは相談の実習を受けた京都自死・自殺相談センター（竹本了悟代表）の相談員やグリーフ（悲嘆）サポートを研究・実践する本山・教学伝道研究センターの研究員が中心メンバーとなっていた。

しかし、継続的な支援のためには、居宅訪問ボランティアの養成が不可欠と、同相談センターは現地で養成講座を開始。2月18、19日には第3回の講座が仙台別院で開かれた。

地元の人や他宗派の僧侶など15人が参加。「苦悩を抱えている時、どんな態度の人に話を聞いてほしいか」「気持ちを受け取ること」などをテーマにワークショップや講義が行われたほか、仮設に暮らす人の役とボランティア役に分かれて対話する模擬体験を行い、居宅訪問に必要な「気持ちに気付く、感情を受け取る、気持ちを表現する」ことを体験的に学んだ（写真）。

「同じ仙台に暮らしながら被害が少なかったことに強い罪悪感を覚えた。自分にできることをしなければと思った」と話す仙台市泉区の小林明代さん(40)は2回目の受講。「震災直後から市のボランティアに登録し、傾聴活動に参加もしたが聞くことの難しさを痛感していた。相手の気持ちを受け取るためには沈黙も大切と、聞く姿勢を学べた。これからの活動につなげていきたい」と感想を寄せた。

曹洞宗総合研究センターの宇野全智さん(39)は「深い悲しみを抱えた人との対話では、何気ない言葉で傷付けてしまう場合があるので、基礎的な学びは必要」としながら、「被災者支援における宗教者の活動は、認知度が高くないのが現状だが、特定の宗教に止まらない宗派間の連携が、一般の人には安心を与える面がある。宗派を超えた大きな輪の中で、連携した活動を進めていければ」と話していた。

同相談センターの竹本代表は「訪問活動の目的は、孤独を抱えた人の苦悩を和らげること。この大切さを理解し、継続して居宅訪問に関われる受講者には、実際に相談員として活動に加わっていただいているが、一人の人間が別の誰かを単独で支えるのは困難。多くの人に受講していただき、チーム、仲間で孤独を抱える人の支えになる活動を続けていきたい」と話している。

これまでに受講者17人が相談員となっており、講座は今後も開かれる予定。